

日蓮遺文と御本尊の花押の推移について ——所謂佐渡百幅の御本尊の系年をめぐって——

若 江 賢 三

日蓮遺文の花押は年代によって変化がある。一方、その多くに執筆年月の記される曼荼羅御本尊にも花押があり、やはり年代による推移が確認できる。しかし、両者の関連づけこれはなかなかの難事と考えられ、山中喜八氏は「同じ日蓮聖人の花押であっても、大曼荼羅（御本尊）と消息（御書）とではその大小の差異が著しいばかりではなく、全体の結構や運筆上の意趣にも、おのずから別異の感触を与えるものがある」と述べている¹⁾。

日蓮真蹟の御本尊については 123 幅が年代順に並べられ、1977 年の時点で『日蓮聖人真蹟集成』の第十巻として法蔵館より出版された。しかしながら、そこに見られる花押の推移と御書花押の推移との関連づけについては、いまだ厳密にはなされていないのが現状である。

1. 所謂「佐渡百幅の御本尊」の花押について

御書花押と御本尊花押との関連の問題と取り組むに当たって、まず解決しなければならないのが「佐渡百幅の御本尊」と伝えられる御本尊の花押に関する疑問である。その御本尊 6 幅の花押部分を示すのが図 1 であり、御本尊番号〈3〉～〈7〉及び〈25〉のものである²⁾。

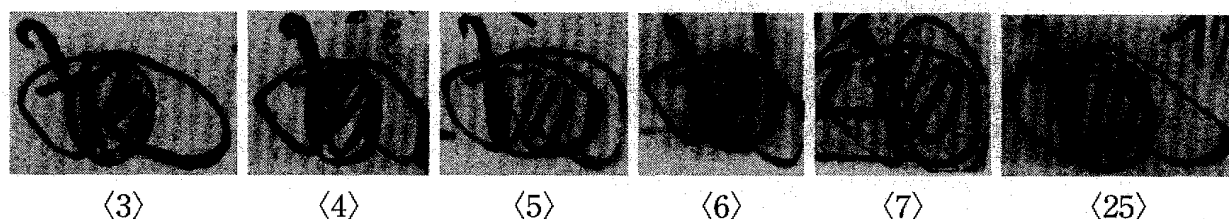


図 1

佐渡流罪直前に依智で顕された初顕の御本尊〈1〉、及び文永 9 年 6 月 16 日と執筆時が記される御本尊〈2〉については、その花押はこの時期に記される御書

(20) 日蓮遺文と御本尊の花押の推移について（若 江）

の花押と比べて違和感はない。文永8年より同12年までの御本尊花押と御書の花押とを比較しやすいように並べて図示すると図2の如くなる。

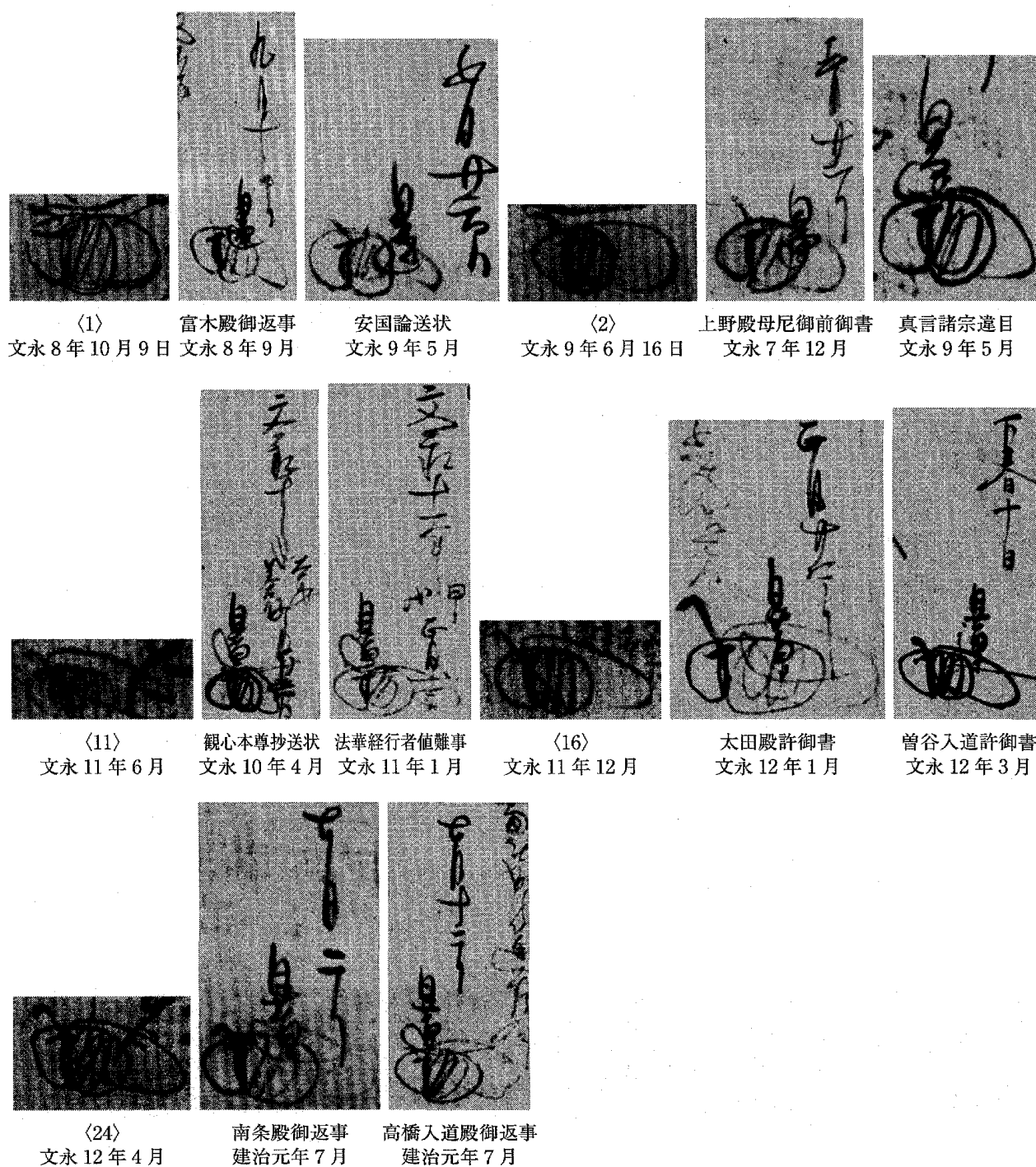


図2

この時期に図顕されたとされる御本尊は〈1〉～〈24〉であるが、この期間に著された御書はというと、例えば文永8年の富木殿御返事、同9年の安国論送状、

同10年の観心本尊抄送状等である。いずれも小林正博氏³⁾のいう読点型のものと認められる。ところが、前掲の図1に示したように、佐渡で顕されたと伝えられる件の御本尊〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈7〉〈25〉の花押については、この時期に記された御書の花押（図2の御書花押）とは、趣を異にする。佐渡期以前の御書花押の特色はそのアヌスヴァーラ（空点）の部分が、読点（または直線）型である。一方、〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈7〉〈25〉御本尊花押のアヌスヴァーラは長伸型と称される部類に属し、佐渡期に記された御書の花押にはこれに該当するものが見られない。では、山中氏の言うように、御本尊花押と御書花押とでは両者は別のものとして見なければならないのか？

この問題を考える上で重要な視点が存在する。それは、実は佐渡期以降のものについて、両者の形態がほぼ一致する組み合わせがあるということである。例えば建治2年4月に顕された〈34〉御本尊の花押のアヌスヴァーラの傾き具合は、その前月である同年閏3月に顕された〈215〉南条殿御返事のそれと酷似しているし、またそれらは同年7月の著述と大学三郎殿御返事⁴⁾の花押の形態とも類似しているのである（後に掲げる図3を参照）。これを偶然として片付けることはできない。とするならば、佐渡流罪中に図顕されたとされる御本尊の年代についても、御書花押とは全く別の原理のもとに顕されたとはいえなく、その花押の背景について、根本的な再検討が迫られることになる。

2. 建治期の花押の推移

次に御書花押の変遷を見る。御本尊花押と並べて図示すると図3の如くである。紙数の関係で建治2年2月以降に焦点を絞ってみてゆくと、建治2年2月の〈31〉御本尊はその前年11月のものと見られる断簡〈198〉と類似し、アヌスヴァーラが少し長くなり、所謂長伸型へと変化している。さらに前述したように、同年4月の〈34〉御本尊と同年の南条殿御返事、大学三郎殿御返事の花押は、弓型へと移行しており、さらに建治3年2月の〈42〉御本尊は、同年5月のものと見られる霖雨御書⁵⁾、及び同年7月の覚性房御返事⁶⁾と形態が類似し、これら3抄が共に建治3年のものであったことを証している。また、同年4月の〈44〉御本尊はアヌスヴァーラが4月11日の壇越某御返事と類似しており、壇越某抄が弘安元年の著述であったとする通説は、建治3年に改めるべきと筆者は考える⁷⁾。ともかく御本尊花押においても角度の緩い弓形から再び角度のある長伸型へと推移しており（長伸弓型）、この時期を過ぎて6月下旬になると、それまでバン字であっ

(22) 日蓮遺文と御本尊の花押の推移について (若 江)

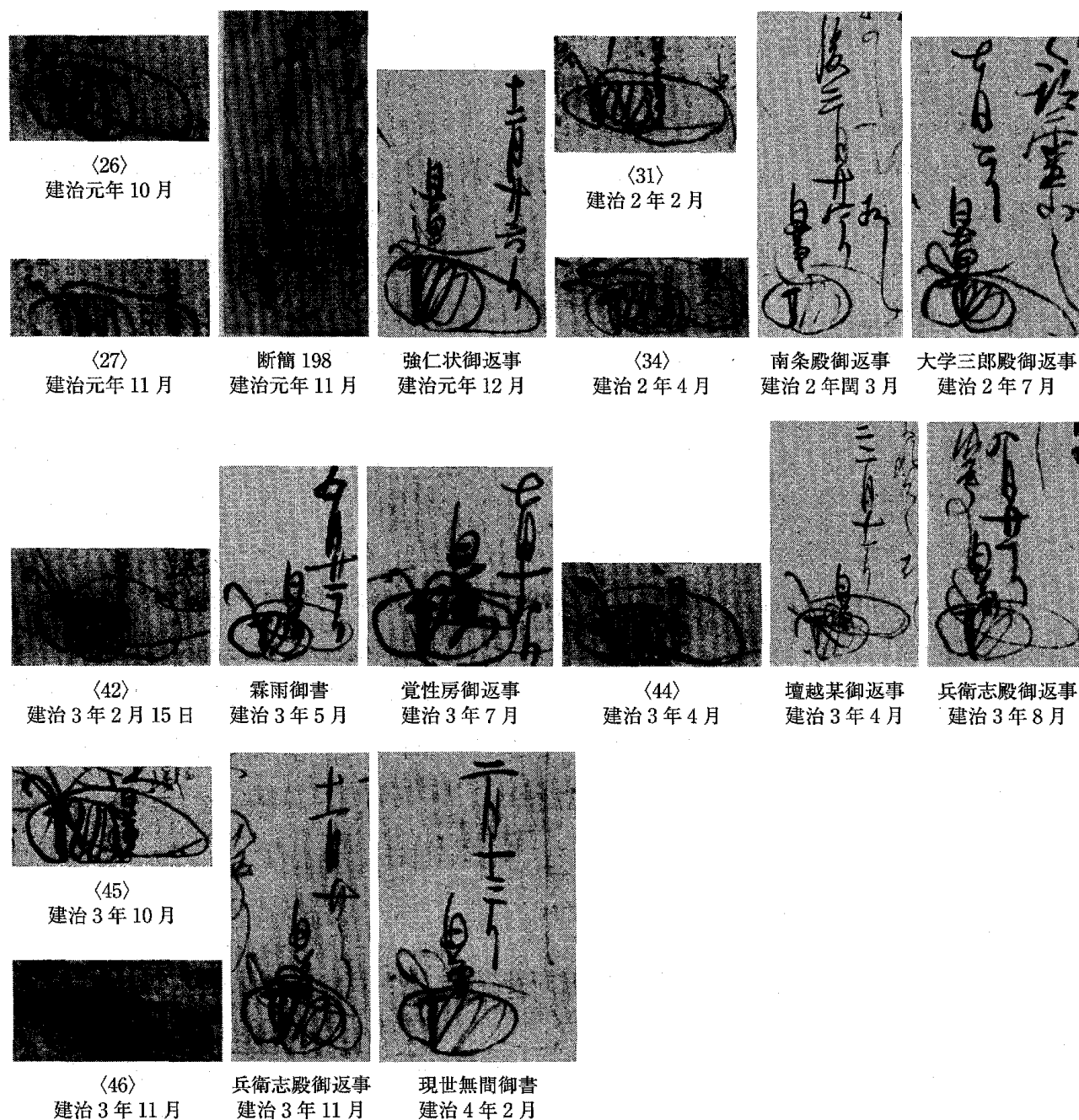


図 3

た花押が突如ボロン字へと変化する。この点は御本尊の花押も同じで、弘安元年 7 月の〈49〉御本尊よりボロン字へと変わり、再びバン字にもどることはなかった。

こうした花押の流れを見てくると、前掲の「佐渡百幅の御本尊」についても、その図顕された実際の時期が浮かび上がってくる。〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈7〉〈25〉御本尊花押のアヌスヴァーラについていえば、〈11〉御本尊の文永 11 年 6 月より〈31〉御本尊の顕わされた建治 2 年 2 月くらいの時期の花押の形態に類似しており、

それ故に、図顕された時期もそれと等しかつたと理解されるのである。一方、御書においても、文永8年より同11年夏までの間には、これら所謂佐渡百幅の御本尊の花押と形態が一致する御書花押は見られないことは前述した通りである。

以上の検討によると、これら「佐渡百幅の御本尊」は実は佐渡期に図顕されたものではなく、身延入山後のものであることが浮かび上がるのである。なお、建治元年より建治2年春までの御書で花押の残っているものは極めて少なく、建治3年に見られる諸御書では、既に長伸型から弓型へと移行している。

次に、建治期の花押のその後の変化について概述すると、建治4年に至るまで、御本尊花押においては、弓形の〈34〉ものを例外とする）アヌスヴァーラはさほどの変化は認められないが、御書の花押についてはかなり激しい変化を見る。

3. 弘安期の花押の推移

弘安年間の御本尊と御書の花押の推移については次の図4に示す通りである。

御書花押においては、弘安元年6月26日を境としてボロン字が用いられるようになるが、その直前よりアヌスヴァーラは一筆のものが主流となり、やがて小林氏のいう○型をへてCL型へと変化してゆく。CL型が現れるのは弘安2年末頃であるが、さらに弘安4年冬頃から、署名の日蓮のしんにゅうの終筆が跳ね上げられてV字になるという特色が見られる。

一方、御本尊の花押においては、御書の花押に見られたほどの微細な変動は見られないが、前述したように、ほぼ同じ時期の御書花押と酷似する御本尊花押が見られる。弘安期に焦点を絞ると、弘安2年2月の〈59〉御本尊の花押と弘安元年12月の出雲尼御前御返事の花押とが形態の酷似する好例である。

もう一組の類似は同じく弘安2年2月の〈60〉御本尊とその前年に著されたと見られる秀句十勝抄とである。御本尊花押のアヌスヴァーラは弘安期になってからはほとんどが蕨型であるが、秀句十勝抄花押の場合はその典型であり、〈60〉御本尊のそれと瓜二つである。こうした例から推測すると、御書花押に見られる特色が少しあとの御本尊花押に現れることがあったことになる。

さらに次の類似の組み合わせは、弘安4年9月の〈110〉御本尊と昭和定本が弘安元年(7月)と系年する御所御返事であり、ことに蓮のしんにゅうがV字になっているのが特徴的である。これも偶然の一致とはいえず、御書花押に見られた傾向が少しあとの御本尊花押に反映された例と言えよう。その故に、御所御返事の執筆年は〈114〉御本尊が顕されるより3ヶ月ばかり前の弘安4年7月であっ

(24)

日蓮遺文と御本尊の花押の推移について (若 江)

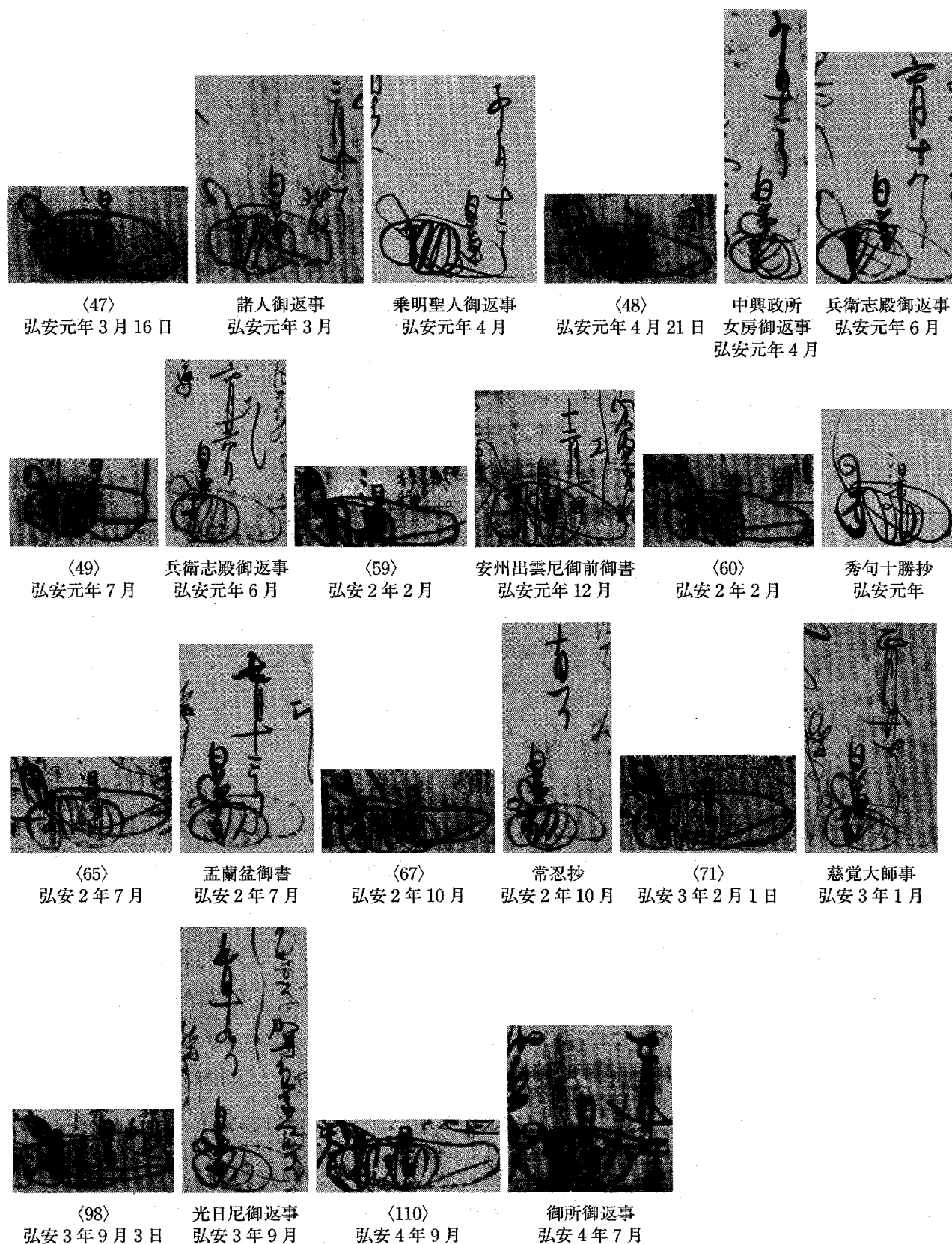


図 4

たと推定されるのである。

結び

これまでの検討から、御本尊花押と御書花押の間には確実にある種の関連があることが明らかとなり、考察によって得られた成果は次のように要約できる。

- ①原則として御書花押の変化が御本尊花押の変化に反映する。
- ②御本尊花押は御書花押の変化ほど激しくは変化しなかった。
- ③佐渡百幅の御本尊とされる〈3〉〈4〉〈5〉〈6〉〈7〉〈25〉は佐渡在中に認められたものではなく、いずれも身延入山後に顕されたものである。

-
- 1) 山中喜八「花押集 解説」（『日蓮聖人真蹟集成』第五巻 1977、所収）。
 - 2) 〈3〉は京都本能寺所蔵、〈4〉は富士宮市小泉久遠寺所蔵、〈5〉は三条市本成寺所蔵、〈6〉豊島区西巢鴨本妙寺所蔵、〈7〉左京区頂妙寺所蔵、〈25〉山梨県身延町本遠寺所蔵。いずれも『日蓮聖人真蹟集成』第十巻、本尊集』による。
 - 3) 小林正博「日蓮文書の研究（3）」『東洋哲学研究所紀要 23』2007 を参照。
 - 4) その系年については若江賢三「御書の系年研究（その6）」『東洋哲学研究所紀要 25』2010 を参照。
 - 5) 若江賢三「御書の系年研究（その7）」『東洋哲学研究所紀要 27』2012（予定）を参照。
 - 6) 上注に同じ。
 - 7) 注4に同じ。

〈付記〉

図版作成において佐藤康氏より多大の援助を得たことを記して感謝する。

〈キーワード〉 日蓮、御本尊、御書、花押、系年

（愛媛大学教授）